



公益財団法人日本ユニセフ協会協定地域組織
佐賀県ユニセフ協会通信 (No. 100) unwish27号 (2018年4月)
佐賀県佐賀市水ヶ江四丁目2番2号
(電話・FAX) 0952-28-2077
(業務時間) 月・火・木・金 10:00~15:00
E-mail unicef-saga@ams.odn.ne.jp
ホームページ <http://www.saga-unicef.jp/>
facebook <http://www.facebook.com/unicef>



シリア・東グータ ドウマに支援物資3カ月ぶりに到着 地下での生活を強いられる子どもたち

ユニセフ職員が包囲下での過酷な生活を報告
ユニセフ、子どもを優先した復旧・復興支援求める

【2018年3月7日 ジュネーブ発】



○ UNICEF/UN0162765/Al-Mohibany
人道支援物資を受け取るため、並んで待つ人たち。
(2018年3月5日撮影)

3月5日、ユニセフなどの国連機関とシリア赤新月社は、シリアの東グータ地区のドウマの子どもたちと家族に人道支援を届けました。

ドウマに支援物資3カ月ぶりに到着

46台からなる人道支援物資を積んだ車列は2万7,500人分の食糧の他、保健・栄養物資などを届けました。ユニセフからは、5台のトラックと数名の職員が車列に参加しました。(ユニセフはドウマに保健・栄養担当、フィールドオフィス代表、運転手、安全管理担当の4人の職員を置いています)

ドウマに最後に国連の人道支援物資を載せた車列が到着したのは2017年11月15日です。今年2月24日に国連安保理決議2401号が採択されて以降、東グータに国連の人道支援物資を載せた車列が入ることができたのは初めてです。

安全上の理由から評価調査を実施することはできませんでしたが、ドウマに入った職員は次の通り報告しています。

- 驚くべき状況です。人々の子どもたちの身に起こっていることへの恐怖と怒りが伝わってきます。
- この4週間、人々はほとんどすべての時間を地下で暮らしていました。地下で暮らすことが日常となってしまうのです。
- 他の地域に暮らしていた家族も激しい紛争を逃れてドウマに避難してきています。今では200人近くが地下で暮らしています。
- 人々はきれいな水を手にいれるのが難しく、浅い井戸から水を汲みあげる手動のポンプを探していると言います。また、地下では仮設のトイレやバケツを使わざるを得ないため、衛生状況を保つのは困難を極めて言います。
- これらの地下室に、子どもたちのための学習教室を開いているコミュニティもあります。ユニセフの自習カリキュラムを使い、地下室に黒板を置き、できる時には教室を開いています。
- 職員が出会った8歳の男の子は、その日、口にしたのは水と砂糖で調理した麦のみだと話しました。昨日食べたのはお椀一杯の米。彼には、明日何か食べることができるのかわかりません。

国連ジュネーブ事務所の定例記者ブリーフィングで、ユニセフの広報官は以下の通り伝えています。

「イドリブやアフリン、デリゾール、ダマスкас、アレッポの一部地域では、依然として暴力が続いています。今年に入ってわずか2か月間の間に、1,000人を超える子どもが死傷しました。また、包囲された町やアクセスが難しい地域に暮らす200万人もの子どもたちは、基本的な人権さえも奪われています。」

紛争開始から7年が経過し、8年目を迎えるシリア危機。
この危機の影響で800万人以上の子どもたちが人道支援を必要としています。極限状態におかれた子どもたちには、今すぐ支援が必要です。シリアの子どもたちを守るためにユニセフは「シリア緊急募金」に取り組んでいます。みなさまの温かいご協力をよろしくお願いします。



○ UNICEF/UN0162760/Khabieh
人道支援物資を載せたトラックを眺める子どもたち。(2018年3月5日撮影)

【資料提供：日本ユニセフ協会】

ロヒンギャ危機/バングラデシュ

ユニセフ、子ども72万人への緊急支援計画発表



© UNICEF/UN0164453/Nybo
7歳のファティマちゃんは、1日に3〜4回水汲みのお手伝いをする。(2018年2月3日撮影)

給水所の緊急浄水、洪水への備えの拡充など 長期的な教育・心のケア支援も

【2018年3月16日 ジュネーブ発】

国連ジュネーブ事務所における定例プレスブリーフィングで、ユニセフ（国連児童基金）の広報官マリキシ・メルカドは、バングラデシュのロヒンギャ難民の子どもたちと受け入れ地域の子どもたちへの支援について下記の通り報告しました。

給水所の緊急浄水、洪水への備えの拡充

本日発表される共同緊急支援計画のうち、ユニセフが占める1億1,300万米ドルは、2018年を通して、ロヒンギャの子どもたちおよびバングラデシュの受け入れコミュニティの子どもたち合計72万人が必要としている支援を提供するものです。

バングラデシュ政府が人道支援団体の協力を受けて行っている甚大な努力により、その多くが死の脅威から逃れてきた子どもたちや家族に、必要不可欠な保護と支援を提供することができています。危機が続く中、この数カ月間も、いまだに毎週約500人のロヒンギャの人々がミャンマーから逃れ、新たにバングラデシュに流入しています。緊急的に必要とされる基本的かつ命を守るための支援規模は、非常に大きいままです。

- ・毎日必要とされるきれいな水の量：1,700万リットル
- ・必要とされるトイレの数：5万基。うち2万8,000基は設置済
- ・依然としていかなる形態の教育も受けていない子どもの数：20万人以上

さらに、新たな緊急に対応が必要なリスクが発生しています。2017年11月と12月に実施された評価調査によれば、給水所の70%が大腸菌に汚染されています。現在、緊急に浄水（塩素処理）対応を実施中です。井戸が汚染されている場合は、手押しポンプをはずして塩素を井戸水に直接投入する必要があります。これまでに30基の汚染された手押し井戸の水を消毒（塩素処理）しました。これから数週間にわたり何千人ものボランティアの協力を得て、キャンプ内に設置された6,000カ所の給水所の水を消毒します。彼らは最大1日20時間給水所に配置され、人々が給水に使用しているポリタンクやバケツの塩素消毒を実施します。

モンスーンやサイクロンからの保護

緊急支援計画には、迫りつつあるモンスーンの雨やサイクロンからロヒンギャ難民を保護するための準備活動も含まれます。以前の予測では、その60%を子どもたちが占める10万人の難民が、雨季の洪水や土砂災害の危険に晒されるとしていました。最新の計画予測では、最大22万人が避難を余儀なくされ、家族が離ればなれになり、あるいは病気に罹るリスクに晒されるとしています。

病気の流行予防は何よりも優先されるべき課題です。昨年下痢が流行した際のピーク時には、毎週最大1万件の症例が報告されました。私たちは今後3カ月に4万483件の症例に対応できるよう準備しています。

現在完全に稼働している下痢治療センターは1カ所ですが、新たに4カ所を設置中です。また、高台での保健センター10カ所の設置がすでに完了し、さらに9カ所を建設中です。



© UNICEF/UN0185024/Sokol
井戸で洗い物をする女の子。
(2018年3月5日撮影)

長期的な教育・心のケア支援も

緊急支援計画には、長期的支援も含まれます。最も重要なのは教育と特に子どもたちへの心理社会ケアを含む保護です。パートナー団体と協力して、4歳から14歳の子ども8万2,000人に、英語、ミャンマー語、算数の基礎教育に加えて若干のライフスキルの基礎的訓練も提供しました。計画では、今年中に27万人を対象とします。これは巨大な事業ですが、子どもたち一人ひとりにとって、希望か絶望かの違いをもたらす得るのです。また、現在すでにケアを受けている約14万人を含む35万人の子どもたちに心理社会ケアを提供します。この心の癒しの支援の必要性を、軽視してはなりません。

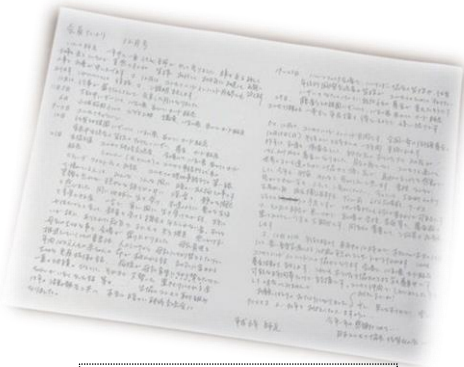
ロヒンギャの子どもたちに対するこの支援計画は、彼らがそもそも国境を越えなければならなかった問題や、また彼らが直面する長期的な課題に対する答えを提供するものではありません。この計画は、子どもたちが置かれた環境に蔓延する病気、虐待、そして死の危険性を回避するためのものです。この計画は、子どもたちに少しだけ、日常に似た状況を取り戻し、子ども時代を生きられるための支援を提供するものです。

【資料提供：日本ユニセフ協会】

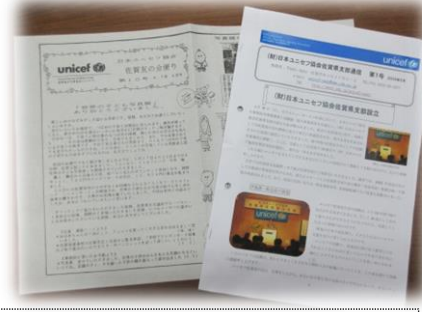
危機下にあるロヒンギャ難民の子どもたちと家族に、人道支援活動を届けるユニセフの活動を支えるため、日本ユニセフ協会は「ロヒンギャ難民緊急募金」を受け付けています。みなさまの温かいご協力をお願いいたします。

機関紙通算100号を迎える!!

1994年（平成6年）12月発行の機関紙「日本ユニセフ協会佐賀友の会会員だより」から数えて、今回の「佐賀県ユニセフ協会通信 uniwish27号」で100号になります。



ボールペン手書きによる
「佐賀友の会便り」第1号



ワープロからパソコンへ
「友の会便り」から「支部通信」へ



事務所スタッフによる手作り印刷から
web入稿外注へ「uniwish」

1994年10月31日の（財）日本ユニセフ協会佐賀友の会設立以来、世界の子どもたちの現状やユニセフの活動の紹介をしたり、ご支援くださる皆様とのコミュニケーションを図るために機関紙を発行してきました。

☆1994年10月31日 （財）日本ユニセフ協会佐賀友の会設立
1994年～2003年 （財）日本ユニセフ協会佐賀友の会便り

- ・ 1994年12月第1号～1995年4月第9号（ボールペン手書き編集）
- ・ 1995年6月号～2002年9月号（ワープロ編集）
- ・ 2002年12月号～（パソコン編集）

☆2004年4月10日 （財）日本ユニセフ協会佐賀県支部となる
2004年5月号～2011年2月号 （財）日本ユニセフ協会佐賀県支部通信

☆2011年4月1日 （公財）日本ユニセフ協会協定地域組織 佐賀県ユニセフ協会に名称変更
2011年7月 佐賀県ユニセフ協会機関紙に愛称「uniwish」決定 uniwish第1号（機関紙NO.74）

「日本ユニセフ協会佐賀友の会」発足時の5歳未満児死亡数は年間1270万人でしたが、2016年には年間560万人にまで減少しました。これもひとえにご支援くださる皆様方のおかげと心より感謝申し上げます。これからもどうぞよろしくお願いします。



平成20年（2008年）12月1日に新公益法人法が発効され、財団法人日本ユニセフ協会は平成23年（2011年）4月1日に公益財団法人日本ユニセフ協会に移行しました。これに伴い、財団法人日本ユニセフ協会佐賀県支部は“公益財団法人日本ユニセフ協会協定地域組織佐賀県ユニセフ協会”へと名称を変更しました。

この節目にあたり、佐賀県ユニセフ協会の機関紙の愛称を『uniwish』としました。ロゴマークのデザインは小石克氏（佐賀新聞社デザイン担当）がボランティアでご協力くださいました。

『uniwish』とは、「unicef（ユニセフ）+wish（願い）」の造語です。

「世界中の子どもたちが笑顔になれるように」との願いを込めてスタッフで話し合い愛称を決めました。「可愛いロゴに惹かれて読んでいます。」との読者の声もあります。優しくあたたかい笑顔になれるロゴをデザインしてくださった小石克氏に改めて感謝申し上げます。

2016年7月号からパワーポイントで作成した原稿をインターネットのweb入稿による外注システムとしました。これによりフルカラー印刷となり、よりきれいな機関紙をお届けできるようになりました。

これからも、世界の子どもたちのこと、ユニセフの活動や佐賀県ユニセフ協会の情報、また、ご支援くださる皆様方の情報を発信してまいります。皆様方に手に取って読んでいただけるような機関紙づくりに努めてまいります。「こんな記事があったらいいなあ…」等のご希望がありましたら事務局までご一報ください。引き続きよろしくお願いいたします。



イオン「幸せの黄色いレシートキャンペーン」参加

- 1月11日（木）・2月11日（日）
イエローキャンペーン参加 <イオン佐賀大和店>
※イエローレシートキャンペーンとは、毎月11日に
レジで発行される黄色いレシートを応援したい団体の
BOX に投函すると、買いもの額の1%がその団体に
寄付されるというものです。
※店頭でユニセフの活動についても広報をしています。
『ほ・ほ・え・み・き・きん』のキャッチフレーズ



- 2月3日（土） ユニセフ出前授業 ～異文化を知ろう～ 「総合的な学習の時間」
小城市立三日月小学校（5年生：128人）
講師：佐賀大学の留学生5名（バングラデシュ、インドネシア、カンボジア）
内容：「衣・食・住・生活習慣」等について

- 2月7日（水） 2月14日（水） ドリームパーク 出前授業
～平和をつたえよう～
千代田東部小学校（千代田町）
ゆめ組 10人、ほし組 12人



- 2月15日（火） 佐賀県立ろう学校中学部の生徒さん2人と
引率の先生3人が事務所訪問
“ユニセフ学習”
～ユニセフと私たちにできること～



- 2月16日（水） 佐賀ライオンズクラブ 募金贈呈
※佐賀ライオンズクラブ設立55周年を記念して、地域社会で貢献している
団体のお役に立てることを」という事で寄付を贈呈されました。

- 2月17日（土） トヨタ紡織九州レッドトルネード募金活動
第42回日本ハンドボールリーグ佐賀大会にて<神埼市中央公園体育館>
- 2月25日（土） トヨタ紡織九州レッドトルネード募金活動
第42回日本ハンドボールリーグ佐賀大会にて<佐賀県立総合体育館>



- 3月2日（日） 柳川市立大和小学校 1年生～6年生 104人
(1) 募金の贈呈（運営委員さん）
(2) 全校朝会でミニ研修会「ユニセフと私たちにできること」
- 3月11日（日） 2018ユニセフ語り場「3・11わすれない」佐賀市立図書館
(1) 「東日本・津波・原発事故 大震災から7年 ～福島は今～」
福島県ユニセフ協会 佐藤一夫さん
(2) 「熊本地震における支援活動」
熊本県ユニセフ協会 古閑幸世さん
(3) 「だれもが安全に安心して暮らせるために」参加者の語り合い
アドバイザー 佐賀県消防防災課 大石知己さん



- 3月12日（月） J A佐賀県女性組織協議会からの「愛の募金」贈呈 佐賀新聞社
家永会長から中尾会長に贈呈
その全額をユニセフ募金とする



- 3月15日（木） 小城市立芦刈観瀾校 ユニセフ募金贈呈及びミニ研修
<芦刈観瀾校小学部、中学部ボランティア委員会>
- 3月19日（月） 佐賀市立諸富北小学校 環境委員会 14人
使用済み切手、書損じはがきの贈呈及びミニ研修

- 3月24日（土） 佐賀市北部児童センター募金贈呈 <佐賀市北部児童センター>



芦刈観瀾校の
ボランティア委員会の皆さん



諸富北小学校
環境委員会の皆さん



北部児童センターの
運営委員の皆さん



ご支援
ありがとうございます

佐賀ライオンズクラブ様 コープさが生活協同組合様 J A佐賀県女性組織協議会様 芦刈観瀾小学校様
芦刈観瀾中学校様 母子草様 トヨタ紡織九州レッドトルネード様 大和小学校様 北部児童センター様
佐賀リハビリテーション病院様 木佐木小学校様

内堀忠次商店様 浜玉中学校様 介護サービスセンターうえむら様 佐賀県高等学校家庭クラブ様
J S A佐賀支部様 諸富公民館様 (株)レジテイク様 武井電機様 佐賀県立ろう学校様 循誘公民館様
ヘルスランチあららぎ様 高齢・障害・求職者雇用支援機構佐賀支部様 副島病院様 佐賀新聞社総務局様
J A佐賀中央会農政広報部様 諸富北小学校様 すぎの子文庫様 佐賀北郵便局様 大塚製薬佐賀工場様
佐賀県婦人会館様 佐賀大学スーパーネット様 佐賀県商工会連合会様 (順不同：2018年1月16日～3月29日)

※ いろいろな形でのご支援ご協力で心から感謝申し上げます。
個人の皆さま方からもたくさんのご支援ご協力をいただいておりますがこの欄での
ご紹介は学校・企業・団体様等のみにさせていただきます。



賛助会員募集中！ 日本ユニセフ協会賛助会員としてご協力ください。

(公益財団法人日本ユニセフ協会の賛助会費は、ユニセフ募金や寄付金と同様、寄付金控除の対象になります。)

日本ユニセフ協会賛助会員とは

日本国内での募金活動、広報およびアドボカシー（政策提言）活動を担う日本ユニセフ協会を、賛助会費によって支援していただく協力方法です。賛助会員になってニュースレターや資料を入手して理解を深め、世界の子どもの状況やユニセフと日本ユニセフ協会の活動を知り、できる範囲で行動する機会にさせていただくことができます。

賛助会員の種類と期間

1. 一般賛助会員 1口 5,000円…個人の方が対象
2. 学生賛助会員 1口 2,000円…学生の方が対象
3. 団体賛助会員 1口100,000円…企業、団体、有志のグループなどが対象 期間は、1年ごとの更新。

✿詳細については、佐賀県ユニセフ協会までお問い合わせください。

これからの予定

- 5月3日（木）有田陶器市会場にてユニセフ募金活動（有田町今右衛門前）
- 5月6日（日）ベストアメニティースタジアムにて募金活動/チーム・ユニセフ・パネル展（鳥栖市 サガン鳥栖VS清水エスパルス戦会場）

- 5月20日（日）第25回ユニセフチャリティーバザー「すべての子どもに生きるチャンス」（佐賀玉屋デパート）
- 5月27日（日）第34回鹿島ガタリンピック会場にて募金活動（鹿島市七浦海浜スポーツ公園）

ユニセフ語り場 2018 「3・11 わすれない」

東日本大震災から7年。熊本地震から2年。
そして、九州北部豪雨から8ヶ月。

日時 2018年3月11日(日) 13:30~16:00
会場 佐賀市立図書館 2F 大集会室
参加者 大人 49人 子ども 1人

「ユニセフ語り場」イベントの趣旨

佐賀県ユニセフ協会では、震災後から毎年3月11日に、東日本大震災のことを「わすれない・風化させない」ために、震災関連のイベントを行っています。

台風や集中豪雨による水害、地震、土砂災害など、自然災害はいつどこで発生するか分かりません。そんな時、子どもたちの命を守り、災害後にもいち早く子ども達にとっての「日常を取り戻す」ためにはどのようにしたらよいか、東日本大震災や熊本地震を経験した方のお話から当時の様子を思い起こし、これからの私たちの備えについて語り合う場を設けたいと考えました。

1. 「東日本・津波・原発事故 大震災から7年 ～福島は今～」 福島県ユニセフ協会 佐藤一夫さん

■講師の佐藤さんは、様々なデータをもとに震災・津波・原発事故から7年経った今の福島の状況を詳しく話してくださいました。震災から7年経った今なお約5万人の方が避難中であり、7年の間に、人口が15万人減少していて、佐賀県で言えば唐津市と鹿島市が消滅したことに匹敵しますと…。故郷へ戻りたいけれども「戻れない」、「戻らない」のそれぞれを選択した人々の苦悩等、様々な話をお聞きし、自分の身に置き換え胸が締め付けられる思いがしました。

■～福島は今～を様々なキーワードで示されました。どの言葉一つをとっても重く、受け止めなければいけないことばかりでした。

- * 故郷喪失(生活の基盤が避難先にできている。)
- * 住民の帰還率は20%余り、「戻れない」「戻らない」が半数以上。
- * 高齢化率が高く、震災関連死などもある。
- * 健康への影響が心配(県民の健康を守ることが大切)
- * 復興は人権を守る長い道のり。
- * 子どもが外で遊べないため、肥満傾向児の増加。
- * 子どもを持つ親のケア 等々…。

■そんな中に、佐藤さん達(福島県生活協同組合連合会、福島県ユニセフ協会、福島大学地域環境論研究室)は、「福島の子ども保養プロジェクト(コヨット)」を立ち上げ、原発事故による被災地の子ども達や保護者をケアする取り組みをされています。

子ども達が外で元気に遊べる『子ども遊び塾』、子育てをするお母さんたちの心のケアをする『コヨット! ほっこりママ会』『料理教室』等についても詳しく紹介をしていただきました。

■最後に、佐藤さんからは「まだ復興は進んでいないと感じている人は59%いる。被災者としてもあらゆる事実を伝えていく、あきらめない、忘れられない責任がある」「自主避難の理解もしてあげて欲しい。一方だけではなく、被災者の色々な話を聞いて欲しい。」

■「教訓として、次世代に繋いでいく事 伝承の大切さ。」

■「防潮堤で、今、漁師は真近に海が見えない。海から離れて漁師は続けられない。津波は怖い、生業が続けられる環境を考えていかないといけない」とも話されました。

■参加者の皆さんは、福島の方々の今なお続く風評被害や様々な苦悩に心を寄せ、「東日本大震災のことを風化させない」「忘れない」と強く感じ、それぞれが自分のすべきこと等を真剣に考えさせられた貴重な時間をもつことになったと思います。



【話をする佐藤一夫さん】



【会場に被災地の写真を展示】



【佐藤さんの話を聞く参加者】

2. 「熊本地震における支援活動」 熊本県ユニセフ協会 古閑幸世さん

■この4月で、熊本地震から早くも2年が経過します。熊本県ユニセフ協会では、これまで2年間、「できるしこ」「できたしこ」というお気持ちで続けてこられた「熊本ユニセフ協会の支援活動」について紹介されました。

平成16年4月20日、保育所へ福島から頂いたおもちゃを届ける活動をスタートに、小学校や児童クラブへレクリエーションキットを届けたり、日本ユニセフ協会からの仮設の教室としての大型 TENT を高校に寄贈を届けたりもされています。

また、6月にはマリールイズさんが大津小学校を訪問されたり、長谷部誠選手のサブライズ訪問があったりと、何よりも震災後の子どもたちの心のケアに努められました。

■さらに、復興支援コンサートや震災の写真展など次世代に残す多くの取り組みも行われています。地震のことを「風化させない」ように！

■まだまだ、支援活動は続いています。2018年今年も、熊本県庁ロビーにおいて、4月9日より「熊本地震・東日本大震災報告写真展～あの日を忘れない 2018～」が開催されます。

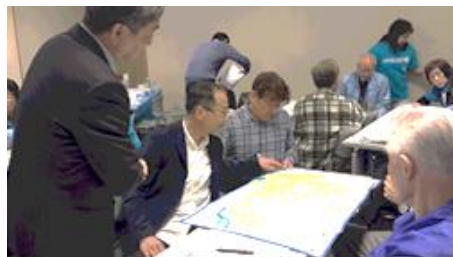


【話をする古閑幸世さん】

3. だれもが安全に安心して暮らせるために アドバイザー 佐賀県消防防災課 大石知己さん

■会の最後の30分間は、東日本大震災や熊本地震を経験された方のお話から、参加者の皆さんにこれからの私たちの備えについても語り合っていました。アドバイザーの大石さんからは、命を守るため、また、犠牲者を出さないために大切なこと等も質問に答える形で伝えていただきました。

■「防災グッズの内容」「災害時の県からの避難勧告指示、防災メール、気象庁からの情報、等のお知らせ」「早めの避難」「地域ごとの避難場所の共有」「ハザードマップの確認」「日頃からの近所の人々の状況を共有」等について多くに質問があり、福島や熊本の教訓を今後に活かす思いを強くしました。



【熱心に語り合う参加者】

参加者の声

○震災から7年が経過しているが、福島の特に原発事故で避難している方々の復興はほとんど進んでいない状況があることが再認識できた。福島の仮設に住まれている方が「わすれられていないと感じる」ことが一番支えとなるとおっしゃっていたことが今日のお話を聞いてあらためて大切なことだと感じました。

○福島の子どもたちのことがよく分かりました。心のケアが必要な方々が大人も子どももたくさんおられることがよく分かりました。これから大人になる福島の子どもたちが健康で元気に安心して育てくださることを祈ります。原発のことを国はもっと早く解決してほしいと思いました。

○熊本地震後の子どもたちの心のケア、ユニセフの取り組みについて知ることができて良かったです。

○「自助・共助・公助」というけど、いざというときには自分の身は自分で守らないといけないが、「自助」ができない子どもや障がい者や高齢者などいわゆる「弱者」を社会がどう守るのか…大変難しくて大事な問題。改めて自分の周りのことを考えた。



【講師の先生を囲んで】

“震災風化させず、帰れる故郷願う”

佐賀市 吉原麻里 さん

佐賀生まれ佐賀育ちの私は、佐賀が大好きです。ふるさと佐賀を失ったら…と想像するだけで気絶しそうです。それが現実のものとなってしまった福島に思いを馳せる時、私はいつも心の置き場に迷います。11日に佐賀市立図書館で開催されたユニセフ語り場2018『3.11を忘れない』で福島県ユニセフ協会事務局長の佐藤一夫さんのお話を聞きました。

「福島は五重の被害を被った。地震、火災、放射能、風評、そして風化。」と言われたことが印象的でしたが、『東日本・津波・原発事故・大震災』から7年が経過した今、事態はさらに複雑化しています。

現在でも、福島県民は5万人以上が避難しています。福島県の人口は震災前と比較して15万人も減少しました。少子高齢化が進み、高齢化率が70%を越えた地区もあります。避難指示解除区域への帰還率の低さが問題になっていて、帰った人も帰れない人も悩んでいます。

県民健康調査が続けられ、様々な思いが交錯しています。県民の健康を守るための検査ですが、世間の最大の関心は「被爆の影響の有無」です。健康への影響が無いという結果が出たら喜ばしいですが、それでは何もなかったことになってしまうのでしょうか…。

私は、震災直後から福島の子ども達が屋外で遊べないことが気がかりでした。全国平均と比較して、福島では肥満傾向児の出現率が高いそうです。子ども達を佐賀に招待して遊んでもらう保養活動も続けられています。どうか子ども達が自由にのびのびと遊べる日が来ますように。

原発事故の責任問題をめぐる裁判も進んでいます。津波を予見できたのか、対策は十分だったのか…。これは玄海原発を抱える佐賀県民として、無関心ではられません。

復興を考えると、防災はもちろんですが、自然との共生も大切なテーマです。福島は農業大国でしたが、除染により表土をさらったために農作物が育たない事例があります。高い防波堤で海が見えないために、漁業を断念する漁師も少なくないそうです。

復興への道のりがまだまだ続く中で、熊本地震の際には福島の人達が支援してくれました。被災者でもある熊本県ユニセフ協会のスタッフが、全国から集まった支援物資を配り、県を挙げて写真展を開催しました。東日本大震災とともに風化しないよう続けてほしいです。

福島も熊本も佐賀も、ふるさとを愛する気持ちは同じだと思います。ふるさとは、帰りたい時に気兼ねなく帰れる場所であってほしいと思います。

(2018.3.20 佐賀新聞“オピニオンコーナー”掲載より引用)

unwish の仲間たち!

佐賀市立諸富北小学校 環境委員会のみなさん —佐賀市—



使用済み切手や書き損じはがき等を「ユニセフを支援する会母子草」に贈呈する環境委員会の皆さん

◆私たちは佐賀市立諸富北小学校の環境委員会です。メンバーは、5年生8人、6年生6人の14人で活動をしています。一緒に活動をしたり、相談にのってくれたりする先生は、大島先生と北島先生です。委員会のキャッチフレーズは『地球を守ろう 環境委員会』です。かっこいいので気に入っています。まずは、自分たちにできる身近なことから「ごみの少ないきれいな学校にしよう」「リサイクルをしよう」「電気や水を大切に使う」など、全校のみんなに呼びかけて、みんなが楽しく、気持ちの良い学校生活が送れるように協力して頑張っています。

主な活動を紹介します。

- ①朝のアルミ缶回収（毎月火曜日当番を決めて、重さを計ったり、協力者を放送で紹介したりします。）
- ②リサイクル活動（各教室にリサイクルボックスを置いて、古切手や書き損じはがきなど集めています。）
- ③水や電気や紙などを大切に使う呼びかけ（全校朝会で呼びかけたり、『地球守り隊』カードでチェックをしたりします。）
- ④花苗植え（花の苗を植えて学校を明るく、きれいにします。）



◆ユニセフとの出会いは、15年ほど前に、その時の6年生がユニセフの募金活動に取り組んだことをスタートに、ずっと続いていると佐賀県ユニセフ協会の人から聞きました。今の私たちも「世界の子どもたちの幸せを願って、自分たちにできること」を頑張っています。使用済み切手は重さを計り、書き損じはがきは枚数を数えて支援をします。2017年度は、**8,400円相当の支援**にもなりました。**「ユニセフを支援する会 母子草」**の方からその募金が、子ども達の命を守るためにどのように使われるのかもミニ研修で教えてもらいました。



「ユニセフ ミニ学習」で話を聞く環境委員会の子ども達

8,400円で、できる支援の例

- (1) ビタミンAは1粒1円、1年に2粒飲むと赤ちゃんの免疫力がアップします。4200人に配れます。
- (2) 下痢をとめる経口補水塩は1つ8円、1050人の子どもが脱水症から救われます。
- (3) 栄養不良治療食プランピーナッツは1食45円、186人の子どもに栄養補給ができます。

自分達の頑張ったことが、人を助けることにつながるという話を聞いて、やりがいを感じました。

◆「環境ISO」にも佐賀市立小中学校全体で取り組んでいます。地球温暖化防止に向けても身近なことから取り組んでいます。（同じように、ユニセフでも2015年9月から国連で2030年までを目途に、SDGs＝持続可能な開発目標を決め、実践化を推進しています。）

「環境ISO」を全校朝会で呼びかけている様子



◆**担当の大島先生のコメント**：子ども達は、リサイクル活動や空き缶回収など朝早くして、1年間続けていました。素晴らしいと思います。「学校を大切にしよう」とか「物を大事に使う」などを全校児童に呼びかけ、コツコツと活動をする姿に、「環境を守ること」、「人の役に立つこと」の大切さ等、「はじめの一步」を子ども達から学びました。

（語り：環境委員会担当 大島敦子先生、取材：江島きよ子）